環境に配慮した北欧の暮らしと美しくサステナブルな家具&プロダクト集

ELLE DECOR JAPAN no.179

エル・デコ APRIL 2025

北欧クリエイターの暮らし

Sustainable DESIGN AtoZ

SUSTAINABLE HOMES AND DESIGNS

サステナブルな インテリア&デザイン

木の家で暮らそう!

藤森照信 | 藤本壮介

ホテル「MAISON ELLE」が誕生

Magazine Cloud 電子版でも読めます

FAMILY MEMORIES

家族と家の記憶を継承した、パリのリノベーション

インテリアデザイナーのマルゴー・ラリーが子ども時代を過ごしたアパルトマン。
改装計画を進めるにあたり、彼女は梁や柱といった古い木組みや家具の保存にこだわった。
ここで祈り、働き、暮らした人々の歴史を受け継ぐ温もりある空間は、見事な再生を果たした。

Photos STEPHAN JULLIARD Original Text IAN PHILLIPS Text RITSUKO ABE

**建築当時の巨大な梁が
ゲストを迎えるエントランス**

絹織物工房当時の釘の跡が点々と残る古い梁。玄関ホールの天井に取り付けたスポットライトがマルゴーのお気に入りの木製絵画、アントワーヌ・ドゥ・サン=ピエールの作品を照らす。ディスプレイ台にしたのは蚤の市で見つけた木製ベンチ。時代が交錯した木の質感が物語を感じさせる。

遊び心あふれる家具と古材が静かなアンサンブルを奏でる

教会だった証しが所々に残るドーム天井の
グ。石造りの窓枠も当時のオリジナル。こ
モチーフと呼応するストライプやドット
ムをインテリアに選んだ。モノトーンの
ロープチェアはオーナー自らがセレクト
70年代のヴィンテージが集う安らぎの空

建物の骨格を尊重しながら機能的なロフトへと改造

天井の梁と鋼鉄製の柱を空間の中心として保存し、ダイニングテーブルとチェア、キッチンの調理スペースに同じテイストの黒いラインをリピート。中2階の小部屋は開放的なロフトにつくり替えた。テーブルはヘーレンハウスの「メサ ネロ」。黄色い陶器製の花瓶はパブロ・ピカソの作品。

家族が継承する家具をインテリアの主役に

右ページ　キッチンの床は機能性に優れた明るい色合いのテラゾーに張り替えた。細工が施された2脚の木製チェアはマルゴーが祖父母から受け継いだもの。壁に備え付けられた木製キューブの集合体は食器棚で、ベルリンのデザインスタジオ、ファンダメンタルグループの作品。

異なる素材の相乗作用でモダンにアップデート

左　ダイニング脇に中2階の2つの部屋に続く階段を設けた。上がり口はキッチンと同素材のテラゾーを敷き、ステップはテラコッタカラーにペイントした。踊り場のオブジェのような黒いブナ材の椅子は、指し物工房ヴァンサン・ヴァンサンの「アーティザナル・モデルヌ80/20」。

"職人の技巧と創造性が、この空間に感情を呼び覚ましてくれました"

フランス南東部に位置するリヨンは19世紀初頭まで世界の絹織物産業の中心地として栄華を誇った。現在もフランス第2の都市として、商業や美食の街としても広く知られている。インテリアデザイナーのマルゴー・ラリーは、12歳から家族と暮らした、この街の右岸にあるアパルトマンに深い愛着を持っている。

子ども時代の思い出の家をセルフプロジェクトで改装

「16世紀に教会として建てられたのが始まりです」と彼女はまず建物の歴史から語ってくれた。

「その名残として正面には彫刻付きのアーチがあり、最上階のこの家にもドーム型の天井が残っています。その後19世紀初頭には絹織物の工房として使われていたようです。普通の家より倍の高さの空間が織機を置くのには必要だったのでしょう。こうした特別なプロフィールだけでなく、子ども時代を両親や姉妹と暮らした家には思い出がたくさん詰まっています。ですから私がこの家を受け継ぐことが決まった時、改装しても家の息遣いを残そうと決意したのは当然のことでした」

パートナーで同業者のリュック・ベルジェと娘のジルの3人で暮らしている。マルゴーは彼との共同作業でアパルトマンのリノベーションに着手した。

「部屋の間取りや家具の場所など隅々まで知り尽くした空間を再構築する試みは、先入観が邪魔をして想像よりも難しい作業でした」とマルゴー。パリの5つ星ホテル「ル・ムーリス」の客室インテリアを担当し、現在は中東で4500㎡の個人邸宅のインテリアにたずさわるという華麗なキャリアを持つ彼女が、ふと本音を漏らした。

まず取りかかったのはメザニン構造(中2階)を残しつつ、壁や扉を取り払い全体のボリュームを再構築することだった。家を支える古い梁や柱を強調し、中2階につながる新しい階段を設けた。続くインテリアはより慎重さを伴って進められた。

「私たちはさまざまな組み合わせから生まれる"反響"に常に敏感です。複数の素材が呼応して起こる化学反応が、美しい装飾をつくり出すのです。同時に今回のプロジェクトではクラフトマンシップも非常に重要な要素のひとつでした」

新しい家族と家の門出を祝うように飾られたアーティザナルなアイテムは、マルゴーの家族に伝わる家具との相性を考慮して選ばれた。リビングルームのソファは改装中に回収された梁の端材をベースにしてアトリエ・ジョフルが製作したもの。淡いピンクのシングルソファはアメリカ人アーティスト、タラ・チャパスの作品、玄関ホールに敷かれたボーダーのラグも手織りの逸品だ。

「こうした職人の技巧と創造性が新たな感情を呼び覚まし、インテリアに独自のニュアンスをもたらす結果を生みました。繊細さの探求こそが私の仕事の根底といえるでしょう」

ヴィンテージの魅力を放つ穏やかで親密なベッドルーム

上　寝室のベッドも代々受け継がれてきた品。古めかしい印象を避けるべく、コンテンポラリーな家具を合わせた。足元にはネリ＆フーの「コミューン・ベンチ」、ベッドサイドのシンプルなウォールライトは岩崎一郎がデザインした「Pin」。優しい色合いのブランケットが温かみを添える。

時代もテイストも異なる家具たちが引き立て合い共鳴する面白さ

右　数世紀前の建物の一角には祖父母の代からのクローゼットを。このアンティークの質感に合うよう柔らかいベルベットのカーテンを選択。樹脂とスチールのアートのようなペンダントランプはフロスの「タラクサカム/コクーン」。絹と緑のあったこの空間に相応しい"繭の照明"を配した。

ミッドセンチュリー家具に囲まれたオープンな印象の書斎エリア

左ページ　玄関ホール上のロフトの一角がマルゴーのオフィス。壁を明るく塗り、自然光が第二の命を吹き込んだ。ジャンフランコ・フラッティーニの1950年代のセクレタリーデスクには、同世代につくられたハンス・ベルマンの「GAチェア」を。幾何学柄のひざ掛けはスローダウンスタジオのもの。

JACQUES CHIRAC
BLACK HOLE